

## 中論の涅槃について

——涅槃品を中心として——

### 八カ 廣喜

中觀學說の涅槃については、すでに宮本正尊博士の詳細な研究があるが、こゝでは、涅槃について龍樹が中論で如何なる位置を與えているかを、主として月稱の註釋を手がかりとして明らかにしたいと思う。

さて、涅槃を問題とする第二十五章を見ると、最初に、空、不空の差別、理解の仕方——これは第二十二章一偈で「すべて假説のために説かれる」と述べているが——に對する論義の第一偈、第二偈、この結論として「すてられることなく得られることなく、不斷にして不常、不生にして不滅、これが涅槃といわれる」（第三偈）と述べ、次いで涅槃の有無についての論義が第四偈から第八偈まで展開され、この結論には「受けて（取つて）或はよつて、來たつてまたは去る存在、それがよらず、受けないのを涅槃であると説く」（第九偈）と述べる。また第十偈では、佛陀が「生有の世界と滅壞の斷」を説いたとして、佛陀の説により論證しようとする。又、有無という分別に對する論難を第十六偈まで展開し、涅槃の證得者たる世尊について有無を論ずることの過誤を指摘し、涅槃に關する一切を遮遣する。これらを通じて結論として「輪廻には涅槃とのいかなる區別もない。涅槃にも輪廻とのいかなる區別もない」（第十九偈）と述べて佛陀が無記 *avyākṛta*, *avyākāta* として表出した斷

常の二見、滅後の問題を、諸見は空に於いて否定され、結局これらの論義は戲論にすぎないことを主張する。換言すると、無自性空ということに於いて、涅槃に關する一切の論義が滅せられることを、四句分別という論理形式で明かそうとするものであり、更にこの論義自体が戲論に外ならずこれもすて去り、一切が寂靜に歸した時に「いかなる法も、どこにも、何人のためにも、佛によつて説かれたことはない」（第二十四偈）ことになるのである。

以上が涅槃品の概略であるが、第三偈、第九偈、第十九偈についてみると、前二偈は有無の見地から——換言すると空間的な立場からの涅槃の定義、第十九偈は時間的な立場からの涅槃の定義にあたりと考えられる。そして、有無については、中論頌のうちの唯一の經名として *Kātyāṇavavādsutra* を引用し「カーティヤーナを教化するとき、世界は存すると存しないとの二つが、有と非有とを分別する世尊によつて否定された」（第十五章七偈）と述べる。月稱は「カーティヤーナよ、この世の人は、或は有と執着し、或は非有と（執着するから）それ故、生老病死憂悲苦惱を解脱しない。五趣生死の牢獄のきずなを解脱しない。母の死よりの苦を解脱しない。父の死よりの苦を解脱しない」（Pr. p. 269, II. 8-10）と註釋している。又、如來の有無についても「しかし、如來は存するという深い執着にとられた人は、涅槃に入つた如來についても存しないと思いつ、分別するであらう」（第二十二章十三偈）「そして、自性上如來は空であるから、佛は滅後に存する或は存しないという思惟は可能でない」（同章十四偈）といふ、如來の有無は「戲論を超えて不滅な佛陀を戲論する人は、すべて戲論に害されて如來を見ない」（同章十五偈）と述べる。そして、時間的な立場からは、輪廻の間

題を取りあげ、「大牟尼は前際は知られないと説く。何故なら、輪廻には始終なく、それには前後もないから」(第十一章一偈)といふ、月稱はこれを經説であるとし「無明の蓋があり、渴愛の結があり渴愛の結目に縛せられたる諸の有情が輪廻しつゝ、走りまわりつゝあるとき前際は知られなむ」(Pr. p. 218. I. 5-6)と述べる。こゝでは、輪廻と涅槃との對立的な把握に對して論難するのである。そして、一切の有所得 sarvopambha が滅した時、それは最上義の世界であり、認識の働き、文字の論義はなく戲論寂滅の相であり、言説をかりて表現するためには、不生不滅云々と否定的にししか表現出来ないのである。しかし、我々にとつては、言説によつて表現出来ないものを、言説をかりて表現する以外に方法はなく存在するという事實に立ち、成立するものであり、例えば「存せるものを存せるものとしてみ、存せるものを超えしは、如實に解脱し、有愛を盡す」(Tivuttaka § 49)ということに外ならない。従つて言説をかりるといふことも、最上義に通ずるものであらねばならず、別な表現をすれば「最上義に到達しなければ涅槃は證得されない」(第二十四章十偈後半)と主張される。更に中論では言説を戲論として捉える。月稱によれば戲論は「言葉であり、言説が諸の義を詳細に説き、多様に展開するからである」(Pr. p. 373. I. 9-10)といわれる。そしてこの戲論は空に於いて滅するという過程を示すのである。さて、中論のテーマは、勿論、有自性論者にむけて、存在するものの相依相對性 parasparāpekṣā による無自性空、中道を開顯することが主眼であり生滅の概念によつて、まず現象的變化を否定し、本質的には、無自性であり、緣起の關係によつて成立することを主張するのであるが、我々は、主觀客觀の成立する世界に存在し、し

かもこの世界が事實上存在の限界である。そこで、龍樹は、施設或は假 prajñapti という概念を興え、空は假なる力によつて成立するものであることを「二つの眞理によつて諸佛の教えがある」(第二十四章八偈前半)とし「二つの眞理の區別を理解しない人は、佛の教えの深い眞理を理解しなむ」(同章九偈)と述べた。それは又、空たること sunyata であり「他によつて知るのではなく、寂靜であり、戲論によつて戲論されず、無分別であり不異義である」(第十八章五偈)とするものであるが、月稱は「空義という因施設 pratyakṣa によるは衆生を涅槃に入らしめるための方便 upāya である」(Pr. 404. I. 14)と云うのである。

この様な立場に立つとき、中論の涅槃は、世俗諦、第一義諦という形式をとりつゝ、緣起 pratīyasamutpāda 空 sunya 因施設 upādāyaprajñapti 中道 madhyamapratīpad とする一連の關係の中に包攝されるものであるが、しかも、龍樹に於いては、單に涅槃が否定されるものではなく、戲論によつて戲論されない眞實相 tatva-lakṣaṇa を保持するものであり、「月稱が一切の戲論寂滅 prapañcopaśama にして吉祥の相ある涅槃が論の目的であることも(歸敬偈に)示されてゐる」(Pr. p. 411)と述べて、涅槃と緣起との關係を最初に指摘してゐることからも明らかである。従つて龍樹に於ける涅槃は、傳統的な立場をふまえつゝ、空の論理に於いて、新しい展開を示していると考えられる。

1 この經典は、パーリでは S. N. Nidāna Vagga の十五經 Kaccāyana sūta に相當するとされているが、相當文との異同が、問題点が多い。概して、月稱の經典引用文とされるものには關係文獻との異同が多く、研究する餘地が残されている。

2 山口益博士、中論釋、二〇九頁參照。